

## 目次

- 1 小説「鉄格子のはめられた窓」ゆかりの地を訪ねて
- 13 八まえがきVトーマス・マン父子とその時代
- 20 鉄格子のはめられた窓 クラウス・マン 作  
— ルートヴィヒ二世の悲劇 — 森川俊夫 訳
- 78 トーマス・マンのミュンヘン時代 一橋大学教授 尾方一郎
- 84 八森川俊夫氏に聞くVトーマス・マンから学ぶ人間愛

# トーマス・マン 生誕の地 リューベック

© Innomann from de.wikipedia.org "Lubeck panorama" (CC-BY-SA 3.0)

北ドイツのリューベックは、小説『鉄格子のはめられた窓』の作者クラウス・マンの父で、20世紀最大の作家と称されるトーマス・マンの生まれ故郷である。小説の主人公で、実在の人物でもあるルートヴィヒ二世は、1845年、小説の作者クラウスは、それから約60年後、ともにミュンヘンで誕生するが、その奇しき縁を紹介するには、リューベックから始めるのが至当であろう。

リューベックの起源は、12世紀にホルシュタイン伯アドルフ二世が、バルト海に通じるトラヴェ川の中洲に河港都市を建設したことに始まる。13世紀に北海・バルト海を商圏とする商業都市間でハンザ同盟が結成されると、リューベックはその盟主として発展した。「ハンザ」とは「商人仲間」という意味である。同盟都市間では共通の貨幣や陸海軍を有し、在外商館を設けるなど、相互の利益を図り、水産物や穀物、毛皮や木材などを取引して、14世紀には最盛期を迎えた。

リューベックやハンブルクなど北ドイツ沿岸で、こうした強力な都市同盟が形成された背景には、イギリスやフランスなどと異なり、ドイツでは王権が弱く、国家統一が遅れていたことが挙げられる。同盟都市間の連携を強めた結果、独自の自治や富とともに誇り高い市民階級意識が形成されるに至ったのである。しかし、16世紀以降、ヨーロッパで近代的国家が続々と形成され、海外進出が活発になると、ハンザ同盟は衰退し、1648年のウエストファリア条約締結によって同盟は解散することとなった。



[聖マリエン教会] 高い尖塔を特徴とするゴシック様式のプロテスタント教会で、1250年から1350年にかけて建造された。世界最大級のパイプオルガンがあることで知られる。

[リュウベック旧市街(右)とその地図(下)]バルト海に通じるトラヴェエ川沿岸の中洲に築かれた港湾都市で、旧市街は川と運河で囲まれている。



[ホルステン門] 1478年に建造された旧市街の城門。アーチ式出入り口の上部には、ラテン語で「内に結束、外に平和を」の文字が刻まれている。



[ブデンブロークハウス] 共に小説家のトーマス・マンと兄ハインリヒを記念した博物館。兄弟がかつて過ごした祖父母の家だった。

© 2007. Torsten Bolten "Buddenbrookhaus in Lübeck" (CC-BY-SA 3.0)



[リュウベック市庁舎] 雄牛の血をまぜて焼いたとされる黒煉瓦造で、青銅色の尖塔を特徴とするゴシック様式の建物。1158年から翌年にかけて建造され、数回の改築を経て今の姿になった。

©GNTB/Freitag

衰えたとはいえ、その後もリュウベックは北ドイツの重要な貿易港としての地位を保ち続けた。トーマス・マンの生家も、この地で有力な穀物商會を經營する名家であった。1891年トーマスの父ヨハンが敗血症はいけつしょうで亡くなると、一家は商會を閉じてミュンヘンに移住するが、リュウベックで生まれ育ったトーマスにとって、父親ゆずりの誇り高い市民階級意識を、終生忘れることはなかった。

世界文化遺産に登録された「ハンザ同盟都市リュウベック」の旧市街には、今でも昔日せきじつの繁栄をしのばせるキリスト教会や修道院、博物館、美術館が各所に優雅なたたずまいを見せている。その中心部にある「ブデンブロークハウス」には、マン兄弟の生涯と主な作品が展示・紹介されている。



## ∞王位を追われたルートヴィヒ二世∞

「国王陛下がいらっしゃった！」と、召使いたちが口々に言い合い、驚きの表情を隠さなかった。何人かは、我先に2階の回廊の窓辺に駆け寄り、他の者は階下のホール、あるいは城の前の砂利を敷きつめた広場へと降りていった。

彼らの誰もが、何が起こったかを知っており、この瞬間を戦慄と緊張の混じった気持ちで迎えないものはなかった。彼らの主人であるバイエルン国王のルートヴィヒ二世が、シュタルンベルガー湖畔にある、その美しい居城ベルク城に到着したのである。

ああ、だが、ルートヴィヒ二世の様相は自由な支配者にふさわしいものではなく、医師たちと看護人たちに付き添われていた。騎馬警官の警護する、その憂いに包まれた不気味な行列には、ミュンヘン宮廷のお偉方が付き従っていた。

召使いたちは、彼らの主人がホーエンシュヴァンガウ城で気のふれた者として、ほとんど犯罪者も同然に逮捕されたことを知っていた。ミュンヘン宮廷の博士たちは、ヴィッ

# 鉄格子のはめられた窓

—ルートヴィヒ二世の悲劇— クラウス・マン 作  
森川俊夫 訳



テルスバッハ王家と大臣たちの了解のもとに、国王に対して恐ろしい宣告を下した。「国王は、病気である」と。さらに医学的判断が進むと、「国王は、心の病である」とされた。数年前から、世間から隔離された場所で半ば獣同然に暮らす国王の兄弟・オト王子のように、不治の病であるという診断だった。

権威ある学者や宮廷の高官たちが、犯罪者に厳罰を下すように国王に対して下した宣告は、パラノイア（偏執病）<sup>へんしつびょう</sup>という病名だった。召使いの中には、その不安になるほど異様な言葉の意味を知る者は、1人もいなかった。しかし、その不吉な言葉の響きには戦慄した。

何といっても、神の恩恵を受け、本来不可侵であるはずの国王が、物乞いのようにひどい皮膚病に侵されたり、子どもが重い百日咳にかかったりするようには、パラノイアになるなどありうるだろうか？ ルートヴィヒ二世は、死の病ペストに侵されたようにパラノイアにかかったため、もはや国を統治することは許されないのだろう。召使いの中でも年かさの者たちや賢い者たちは、「たぶん家系の中に原因があるにちがいない」と、不幸なオト王子の身の上をほめかしながら噂<sup>うわさ</sup>しあった。

しかし、その召使いたちも、この混乱したおぞましい事件の中でのヴィッテルスバッハ王家や大臣たち、そして医師たちの態度に関しては、首をかしげることが多かった。ベルク城の召使いたちは、皆主人たる国王陛下が悪質な陰謀によって退位させられ、狂気の人と宣告されたのだと推測していた。なかでも、国王の叔父ルーイトポルト公は、バイエルン王国の摂政せっぽうになりたがっていた。すべては、そこに帰着した。それゆえ、神の恩恵を受けるはずの支配者は、いまやほとんど牢獄に等しい部屋に姿を消すことになったのだ。

ルーイトポルト公が玉座をねらってたために——召使いたちは、そうした不信の念を抱いていた——、医事顧問官フォン・グデン博士とその数人の同僚によって代表される科学が、「パラノイア」という悪魔的言葉を考案し、国王になすりつけたのだ。この点について、ベルク城の召使いたち——この地の実直な男たち——は、すべて同じ意見だった。

しかし、その召使いたちも、自分たちの意見、すなわち疑惑については、もはや公然と口にしようとはしなかった。国家という権力が、ルーイトポルト公とフォン・グデン博士の肩をもって国王を敵に回したため、国王の身は敵の手に渡され、見捨てられ、犠牲になったのだ。ルートヴィヒ二世は、権力によって見捨てられた以上、もはや国王と呼べるかどうか、などと誰が口に出してい

えようか？ 抵抗は無意味であった。その点、召使いたちは、立場をよく心得ていた。彼らは権力の及ぶ範囲内で呼吸することに慣れていて、それに逆らうことは、実際にはほとんど問題にならないことを知っていたからである。

召使いたちは、密かにホーエンシュヴァンガウ城の人々に共感を覚えていた。それらの人々は、山岳地帯出身の男たち、つまり地元の警備隊員で、ミュンヒェン宮廷のお偉方たち——医師や大臣、廷臣たち——が、国王を逮捕して拘禁しようと城へ到着した時には、小規模ながらも革命を起こしてそれに抵抗しようと計画していたのだった。「ホーエンシュヴァンガウ城の人々の動きは、何と勇敢なことだよ！」召使いたちは、誰もが例外なしにそう感じた。

しかし、別の見方をすれば、それが何の役に立ったのか？ 地元の牧人たち、小作人たち、農民たちの向こう見ずなささやかな行動が、どのような効果をもたらしたのだろうか？ もちろん、さしあたり一旦はミュンヒェンからのお偉方たちを大鎌や銃、騒音で脅かし、引き揚げさせることに成功した。

しかし、お偉方一行は、再びやってきた。彼らは権力をかさに着てやってきたのである。彼らの背後には、権力のあらゆる偉大さが、目に見えぬままで立っていたのである。それは、彼らが昨日まで地面に付くほど深々と

頭を下げていた、神の恩寵を受けた国王に対して、馬車でホーエンシュヴァンガウ城からミュンヒェン近くにあるシュタルンベルク湖畔のベルク城へと向かうことを強要することになった。こうして、ルートヴィヒ二世は、ベルク城に監禁され、猛獣のように閉じ込められることになったのである。

ルートポルト公とフォン・ゲデン博士、大臣ら、ミュンヒェンのお偉方たちは、退位させた国王をベルク城にうまく閉じ込め、脱出したり自害したりしないよう、さまざまな予防措置を講じさせた。たとえば、召使いたちは、ルートヴィヒ二世を決してナイフやフォークを持たせたまま部屋に1人だけにしないよう、嚴重に命じられていた。職人たちを呼び寄せて、国王の寢室の窓に鉄格子を取り付けさせた。それぞれの窓に5、6本の鉄の棒を狭い間隔で、はめ込ませたのである。

これは、数多くの美しい城館に、自由にしかも華麗に君臨していたルートヴィヒ二世の栄光の終わりを意味し、それを証明するものだった。かくも侮辱的な予防措置が講じられることで、国王が神から受けていた恩寵は、国家権力によつてむごたらしく否認されたのだった。失脚した君主は、強盗殺人犯のように、鉄格子のはめられた窓の奥で、残された命の日々を過ごさなければならぬだろう。

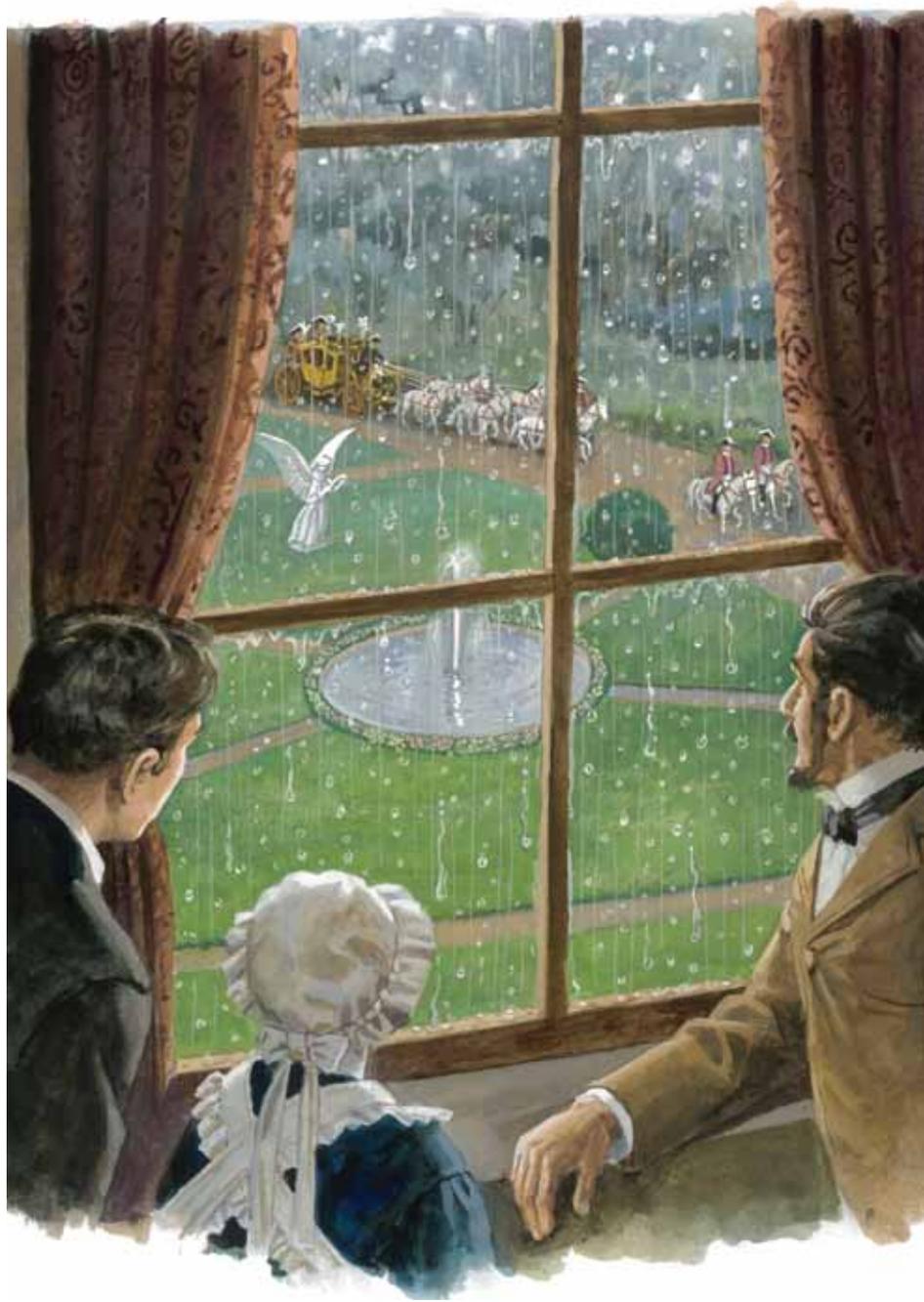
哀れな美貌の君主に対する科学と国家の非情な仕打ち

の数々は、もちろん召使いたちに強烈な印象を与えた。それにもかかわらず、彼らは主人のルートヴィヒ二世が、精神に異常をきたし、頭脳がパラノイアと呼ばれる恐ろしい病に侵されているとは信じようとしなかった。国王に直接仕えている召使いたちは、その極端な変人ぶり、荒っぽい性格や気まぐれさがわかっていただけに、ルートヴィヒが恐ろしい病気にかかっているなどとは、夢にも考えられなかったのである。はなはだしく予測不能で、極端に走りがちな国王の性格は、大臣たちの激しい怒りを呼び起こすこととなったが、農民の息子たちである召使いたちには感銘を与えた。

このように、国王をよく知る者たちは、皆王を愛していた。しかし、今となつては彼らは、権力に対する敬意から沈黙し、職人たちがベルク城で国王の居室のすべてのドアノブを取り外したときさえ、文句を言わなかった。

「国王陛下だ！」と、召使いたちは血の気の失せた唇でささやいた。そして、正面玄関の前や2階の窓から、馬車が近づいてくるのを眺めた。

雨は、数日前から相変わらず激しく降り続いていた。召使いたちは、皆「今年（1886年）の6月のように、これほど湿度が高くて、冷たい6月は、これまで経験したことがない」と言った。雨は、灰色の布のように風景を包み込んでいた。細くのびた湖の対岸は、見えなかつ



た。雨は、城の屋根や庭園の木々の梢を絶え間なく叩いていた。

「国王陛下下だ！」

その声に促されるように、庭園のはるか奥に止まった2番目の馬車から、医師かあるいは看護人だろうか、平服の男が出てきて、ルートヴィヒ二世の座っている馬車

召使いたちは、自分たちの主人が上体をすべて馬車から乗り出して、医事顧問官に対して気位高く拒絶の姿勢を見せ、差し伸べられた腕に触れもせず、しなやかでほとんど楽しげな大きな動きで、この狭い穴蔵、あるいは走る檻から解放されるのを喜んでいるかのようには、馬車を離れるまでの一部始終を、満足げに見守っていた。ルー

の扉を外から押しボタンを押して開いた。召使いたちは、半ば腹を立て、半ば国家権力の非情な慎重さに恐れおののきながら、この新たな処置について語り合った。馬車の扉からは、国王の居室の扉同様、ドアノブが外されていたからである。

もう1人の人物が、国王を馬車から助け下ろすために、馬車へと急いで歩み寄った。何人かの召使いは、それが誰であるかに気づいた。それは、医事顧問官フォン・グデンだった。しかし、ルートヴィヒは、自分に対する介添えを一切断った。

トヴィヒは、馬車の扉から2、3歩大股で離れると、硬直して立像のように立ち止まって動かなくなつた。それは、高々とそびえる、ほとんど巨人とでもいうべき様であつた。横幅のある、悲劇的に暗く、深く垂れた黒い雨用のケープに包まれた像は、幅広つばの帽子を深々とかぶつていた。

医事顧問官フォン・グデン博士は、恭しげに、しかし驚きながら、急ぐように促すような態度で、禿げ上がった学者風の額を小止みなく音を立てている雨に打たせて、王のかたわらで待ち構えていた。

ルートヴィヒは、なお数秒間ためらつていた。博士の禿頭とわずかに残つた薄い髪の毛をびしょ濡れにするのが、ルートヴィヒには意地の悪い楽しみでもあるかのように見えた。

やがて動き出すと、もう振り返ることはなかつた。大きな歩幅で城に向かつて動き出すと——グデンはようやくついていくことができた——、頭を下げる召使いたちのそばを通り、玄関からホールを抜けて階段を上り、自分の居室へと急いだ。

その後を看護人、医師たち、そして実は監視人で、スパイでもある廷臣たちが追つた。彼らは、心身の正常を失つて退位を宣告されたルートヴィヒの憂鬱な家臣たちであつた。

## ∞窓に鉄格子のはまつた部屋で∞

ルートヴィヒが階上の自室で最初に確認したのは、「窓に格子をはめてある」という事実だつた。この上ないほどに気位の高さを示しながら、ルートヴィヒは肩をすくめ、幅広帽子のつばの陰になつてゐる視線を驚くほど暗くした。フォン・グデン博士は、軽く会釈すると、「偶然でございますよ、陛下……。純粹に裝飾的な理由からでして……」と言つたが、まつたく意味のない言葉だつた。

そして、この言葉の中に、まさに国王にとつて侮辱的で、軽蔑すべき意味が込められていた。それは、まるで人の言葉のうちで、何に意味があり何に意味がないかを、国王はもはや区別できないとも言いたげであつた。

医事顧問官グデンは、にこりと笑みをつくらうとしたが、頭を後ろの方へ投げるかのようにして、激しくも大いなる怒りがうかがわれるルートヴィヒの態度を前にして、その試みは惨めな失敗に終わった。そのとき、王の目は閉じられていた。波うつように垂れた外套をはおり、幅広つばの帽子をかぶつて、妙にロマンティックなさすらい人の衣装を着けたまま、固く握りしめた王の両手は、怒りに震えていた。満面に嘆きをたたえた白い顔は極彩色の天井画に向けられていたが、苦痛と嫌悪に満ちたその表情は尋常ではなかつた。

グデンは、戦慄を覚えながらも、国王の様子をうかがつ

## 〈作〉 クラウス・マン (Klaus Mann)

1906年、ドイツのミュンヘンで、ドイツ人作家のトーマス・マンとユダヤ系ドイツ人のカタリーナ・マンの間に生まれる。1925年、19歳から小説を書き始め、翌年最初の作品を出版。世界恐慌をきっかけにナチスが台頭すると、父トーマスらと反ナチ活動を開始。同性愛者でもあったため偏見の目にさらされ、1933年にオランダに移住。この頃『鉄格子のはめられた窓』などの短編小説を執筆。36年にアメリカに亡命して反ナチ活動を続け、43年にはアメリカの市民権を得てアメリカ兵としてイタリア戦線に出征する。しかし、相次ぐ親友で同性愛相手の自殺で、以後孤独と不安に苛まれ、1949年にフランスのカンヌで睡眠薬自殺を遂げた。主な著書に、『小説チャイコフスキー』(日本語版・音楽の友社刊)、『メフィスト―出世物語』(日本語版・三修社刊)、自伝『転回点』(日本語版・晶文社刊)などがある。

## 〈訳〉 森川俊夫 (もりかわ・としお)

1930年東京生まれ。水戸高等学校、東京大学独文科卒。熊本大学法文学部助手、東京大学文学部助手、電気通信大学専任講師、1961年一橋大学専任講師。西ドイツのチュービンゲン大学へ留学。1963年一橋大学助教授、1971年同教授。1992年定年退官し同名誉教授、同年から2003年まで東京国際大学教授。トーマス・マンの作品を研究テーマにする一方、戦後ドイツ文学界の気鋭、ロルフ・ホーホフートの『神の代理人』(白水社、1964)、『兵士たち ジュネーヴ鎮魂歌』(白水社、1967)、『ゲリラ 五幕悲劇』(越部暹共訳、白水社、1971)などを翻訳。その後『トーマス・マン全集 11 非政治的人間の考察』(新潮社、1972)、『トーマス・マン全集 1 ブデンブローク家の人々』(新潮社、1972)などのトーマス・マン作品の翻訳を手掛け、1988年から2016年にわたり『トーマス・マン日記』全10巻(共訳、紀伊國屋書店)の編訳・刊行に携わった。全10巻が外国語に翻訳されているのは日本語だけであり、2016年の日本翻訳出版文化賞が紀伊國屋書店に贈られたが、訳者の森川俊夫の粘り強い努力の賜物である。

## 〈絵〉 梅田紀代志 (うめだ・きよし)

1940年生まれ。挿絵画家。CM制作会社でアニメーション制作に従事したのち、イラストレーターとして独立。少年雑誌の挿絵や図鑑の標本画などを中心に活動し、その後、歴史画に転じる。『世界人物百科』(日本図書センター)をはじめとする書籍、歴史資料集などを舞台に活躍している。主な著書に『『古事記』の世界』(小学館)、『日本仏教の開祖たち』(全5巻、PHP研究所)、『江戸川乱歩とその時代』(PHP研究所)などがある。

- ◆ 写真協力 晶文社、ドイツ観光局、Bayerische Schlösserverwaltung、Lübeck und Travemünde Marketing GmbH  
※一部の写真はクリエイティブ・コモンズのライセンス形式に則り掲載しております。
- ◆ 地図製作 ジオカタログ、ハユマ (田所穂乃香)
- ◆ 撮影協力 柳平和士
- ◆ 執筆協力 尾方一郎 (一橋大学教授)  
中村明 (元共同通信編集委員、1970年一橋大学社会学部卒、元森川ゼミ在籍)
- ◆ 編集協力 スペースアルファ (安部直文)、川添能夫
- ◆ 編集・装幀・本文デザイン ハユマ (戸松大洋、小西麻衣、田所穂乃香、大場みのり)

# 鉄格子のはめられた窓―ルートヴィヒ二世の悲劇―

2017年1月20日 初版第1刷印刷

2017年1月25日 初版第1刷発行

著者 クラウス・マン

訳者 森川俊夫

絵 梅田紀代志

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1587-9 ©2017 Klaus Mann, Morikawa Tosio, Umeda Kiyosi, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。